『社会と調査』 社会調査士資格認定機構　有斐閣　2008 年　vol. 1　 107 頁

調査の達人―横山源之助の「近代の視線」

青木　秀男

日清・日露戦争を挟む明治後半から大正初め、日本は、産業革命を経て機械工業の隆盛をみた。農村では寄生地主が増え、貧しい小作人が都市へ流れていた。都市では、労働と貧困の問題が生じていた。下層社会の主役は、伝統的貧民（職人や小商人、雑芸人等の雑業層）から近代的貧民（日雇いや職工等の雇用層）へ交替していた。その景観は、辻裏通りの長屋から貧民窟・木賃宿街に変貌していた。このような時期、横山源之助（1871-1915 年）は、通信記者として、木賃宿に泊り、工場を訪ね、農村を歩いて、雑業民や職人、職工、小作人の労働と生活を調査し、新聞・雑誌に記事を書いた。そして、資本主義の諸結果を下層社会から批判し、そこから、労働・貧困問題の解決を図る方途を模索した。この中で編まれたのが、『日本の下層社会』（1899 年）である。

本書には、横山の「近代の視線」がよく表れている。本書以前にも、いくつかの貧民窟・木賃宿街ルポがあった。しかし本書は、それらと異なっていた。まず本書には、下層社会を一般社会へ包摂して捉える視点があった。本書以前のルポでは、貧民窟・木賃宿街は、一般社会とは異質な社会空間として記されていた。書き手は、驚嘆と恐怖を以てそれらを探検し、住人の極貧の生活と奇異な慣行を記していた。これに対して本書では、下層社会は、一握りの中流階級以下の多数を占める貧民が住む、一般社会と同質の社会空間として記された。次に本書では、都市の孤立した貧民窟・木賃宿街に視線が釘づけされた本書以前のルポとは異なり、日本の下層社会の全体、すなわち小作人から職工まで、下層社会の全体が鳥瞰された。さらに本書には、記述に対する方法的な問題意識があった。本書以前のルポでは、下層社会は、若干の項目を立てながらも、書き手の恣意的な見聞と感想の赴くまま記されていた。これに対して本書では、観察・聞取りの資料と統計資料が併用され、貧民の労働と生活が、雇用・労働・居住・救済等、統一された分析項目に沿って、整然と記された。また、地方と地方、地方と全国を比較する一般化の方法が取られた。そのために、職工、小作人、労働組織、雇用関係等の範疇が、類型的に整理された。このように本書では、探検的・体験的・主観的な記述を越えた、合理的・体系的・客観的な記述の方法が取られた。最後に本書には、貧民の労働・貧困問題をどう解決するかという、実践的な問題意識があった。労働・貧困問題が、資本主義の産物であるものなら、社会はそれを解決できるはずだし、またその義務を負う。貧民の調査研究は、その問題解決のためにある。横山はこう考えた。

横山は、貧民を愛し、貧民が被った資本主義の残酷を告発した。労働問題の解決を図り、労働運動に参加した実践家であった。貧困解決の方途として、貧民の海外移住に注目し、自らブラジルに出かけもした。しかし他面で、横山には屈折する近代の顔があった。横山は、「勤勉な」貧民を称え「懶惰(らんだ)な」貧民を難じた。また、体制変革の社会主義と袂を分かち、改良主義の運動を求めた。そして政府に近代的な施策を懇請した。さらに横山は、物価の騰貴を招いて貧民を苦しめたと戦争を批判した。しかし他方、帝国主義的な朝鮮半島や「満州」の領土併合を歓迎した。横山は、下層社会の科学的調査を行ない、開明的な提言を行なった。同時に、近代自体が胎む闇を抱えていた。横山は、近代の二つの顔をもち、貧困問題を論じる時代の人であった。